

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：13201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730607

研究課題名(和文) 思春期の学校メンタルヘルスに及ぼす自尊感情とその安定性、随伴性自己価値の作用

研究課題名(英文) Global self-esteem, stability of self-esteem and contingencies of self-worth among Japanese adolescence.

研究代表者

石津 憲一郎 (Ishizu, Kenichiro)

富山大学・人間発達科学部・准教授

研究者番号：40530142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、思春期の学校メンタルヘルスに、自尊感情や自尊感情の安定性、随伴性自己価値がどのような影響を与えるのかを検討することであった。まず、大人とは異なり、子どもでは自尊感情が低く不安定な者の攻撃性が高いことが示された。また、随伴性自己価値の高さは内省的で気持ちを切り替えるような怒り処理を行う一方で、ストレスと組み合わせると、ストレス反応が高まることも示された。一方、思春期の子どもにとって自尊感情の変動性は安定的な指標とならない可能性が示唆され、結果の解釈は慎重である必要がある。

研究成果の概要(英文)：In this study, I examined how global self-esteem, stability of self-esteem and contingency of self-worth affect to school adjustment among Japanese adolescents. First, I confirmed that student who had low self-esteem and high instability of self-worth showed more aggressive behavior compared with those who had high self-esteem. And I also found that stress response was higher in those who have high contingent self-worth when school stressors were evoked. But contingent self-worth showed positive correlation to with appropriate coping of aggression.

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：教育心理学

キーワード：思春期 ストレス 自尊感情 自尊感情の変動性 随伴性自己価値

1. 研究開始当初の背景

これまで自尊感情は様々な適応的な行動や学業成績、精神的健康と関連するとされ、いかに自尊感情を上昇させるかに大きな関心が寄せられてきた (Baumeister et al., 2003)。確かに高い自尊感情は個人的な満足感や集団における主導権を導くが、逆に低い自尊感情が暴力や薬物を説明するわけでもなく (Baumeister et al., 2003), 「高い自尊感情」と「最適な自尊感情」が本質的に異なることを踏まえる必要がある (Kernis, 2003)。むしろ逆に高すぎる自尊感情が社会適応を阻害する可能性にも注目が集まり (Baumeister et al., 2003), 測定している自尊感情の構成要素の中には、その安定性や病的な自己愛を統制しきれていない可能性が指摘されている (Baumeister & Bushman, 2000)。

Rosenberg (1986) は「とてもよい」自己像ではなく「これでよい」という自己像を測定するために、Rosenberg 自尊感情尺度を作成した。それと同時に Rosenberg (1986) は、自尊感情は Barometric な安定性と Baseline 安定性があることを指摘し、前者は短期間での変動性を、後者は長期にわたっての変動性を意味するとした。このように自尊感情にはある程度の変動性(不安定性)があることは、当初から指摘されていたものの、そうした視点が自尊感情研究に取り入れられるようになったのは、その指摘からしばらく経ってからのことであった。

自尊感情の変動性は主に成人を対象として研究が蓄積されてきた。例えば、それは攻撃性 (Kernis et al., 1989) や抑うつ (Kernis et al., 1991) を説明することが示され、少なくともメンタルヘルスや対人関係とネガティブに関連することが明らかとなっている。子どもを対象とする研究では、松原・藤生 (2005) は自尊感情の変動性と他者評価の攻撃性との関連を示し、Wachull & Kernis (1996) は内発的動機づけや攻撃性との関連を検討しているが、その数は非常に少なく、大人と同じような周期やネガティブなイベント依存性を持っているのかについてはそもそも検討されていない現状もある。

Rosenberg (1986) は、上記の自尊感情の変動性や安定性に関して、様々なソースからの情報は基本的に矛盾した情報を含み、それゆえに外的な評価に本質的な重要性を置く者はそうでない者よりも、日替わりの自己評価として揺れ動いてしまうとも述べている。つまり、他者からの評価に自己の価値を置く者は自尊感情が不安定になることを指摘している。そして、この視点は、随伴性自己価値(自尊感情)や自己価値(自尊感情)の随伴性(contingencies of self-worth)と定義さ

れ、研究が行われてきた。随伴性自己価値とは、自己の価値が何らかの外的基準の査定に依存しており、その基準で高い(低い)達成を得ることと己の自尊感情とが共変動することである。

こうした外的な基準に過剰に迎合し、個人の欲求を押し殺してでも周囲に合わせる傾向は過剰適応と定義され、その非適応性が検討されてきた(e.g., 石津・安保, 2008, 2009)。随伴性自己価値では、過剰適応のように外的な基準に基づく評価を常に求め続けねばならず、また自尊感情の基盤としてはとても信頼性が低いため、日々出会う脅威に対して脆弱性となりうる (Crocker, 2002)。したがって、自律性を含むより堅固な自己感覚に基づく「本当の自尊感情」と随伴性自己価値は正確には区別されることとなる (Deci & Ryan, 1985)。この随伴性自己価値は自尊感情の変動性とも関連することが想定され、メンタルヘルス上それは脆弱性でもありとも考えられている。現在の中高生は常に自己評価を自覚せざるを得ない環境にあるが(佐藤・杉原・藤生, 2000)、他者からの評価に敏感になる時期である思春期を対象とした随伴性自己価値の研究は世界的に見ても極めて少ない。これまで、随伴性自己価値は自尊感情とは無相関もしくは、弱い負の相関があることや、随伴性自己価値が高い者は長期的に見て問題を起こしやすいことが成人の研究から指摘されている (Crocker & Park, 2004)。

2. 研究の目的

1) 思春期は、多くの子どもの公的自意識が増大し、外的な評価を重要視する時期である。自尊感情の変動性はストレスとどの程度連動するのか、またその連動に個人差がどのように見られるのかといった、安定性の個人差に関する一層の基礎的検討が必要である。それゆえ、自尊感情の高低、安定性、随伴性がどのように学校メンタルヘルスを予測しうるのだろうか。また、それらは単独に作用するのか、もしくは相互に関連しつつ作用するのだろうか。

2) 近年、児童生徒の「キレル」現象や校内暴力の増加が懸念されている。不安定な自尊感情は攻撃性と関連することはすでに示されているが、自尊感情の高低や随伴性自己価値が情動認識/情動調整や怒りの表現といった怒りの処理プロセスにどのような影響を与えうるのだろうか。

少なくとも、自尊感情を高低の視点だけで捉えようとする試みはその限界が指摘され (Kernis et al., 1991)、自尊感情のより複雑な機能が注目される。そこで本研究では、思春期における自尊感情の機能が、学校メンタ

ルヘルスとどう関連するのかを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

研究は大きく分け4つに分類される。

研究 思春期における自尊感情の変動性と自尊感情との関連

調査協力者：北陸地方の中学生 142 名（男子 70 名，女子 72 名）を分析の対象とした。

測度： 自尊感情尺度：山本ら（1982）によって作成された Rosenberg の自尊感情尺度を使用した。

学校ストレス尺度：岡安ら（1999）によって作成された 12 項目を使用した。

手続き：自尊感情尺度への回答は，月曜日から金曜日まで 5 日間連続で，帰りの会毎にお願いした。また，金曜日にはそれに加え，

ストレスの頻度も記入してもらった。また，調査は 2 か月の期間をあけて 2 回行い

（Time1, Time2），それぞれ同じ手続きで回答してもらった。5 日にわたる回答で得られた

自尊感情の個人内平均得点を level of self-esteem 得点（以下，自尊感情得点）とし，

5 日間の個人内標準偏差を stability of self-esteem 得点（以下，変動性得点）とした。したがって，2 回の調査によって，自尊

感情得点，変動性得点，ストレス得点がそれぞれ 2 回ずつ得られたことになる。

研究 思春期における自尊感情の変動性と攻撃性の関連

調査協力者：北陸地方の中学生 154 名（男子 82 名，女子 72 名）を分析の対象とした。なお，調査協力者は研究 とは異なる。

測度： 自尊感情尺度：山本ら（1982）によって作成された Rosenberg の自尊感情尺度を使用した。

アタッチメント：アタッチメントの測定には 2 種類の尺度を用いた。一つ目は加藤

（1998）によって作成された Bartholomew らによる 4 分類愛着スタイル尺度を中学生にも

わかりやすい表現に改定して用いた。この尺度によって個人の愛着スタイルは「安全型」

「拒絶型」「とらわれ型」「おそれ型」の 4 つに分類される。また，佐藤（1993）による親

への愛着尺度を，アタッチメントを量的にとらえるために使用した。下位尺度は「不信・

拒否」「安心・依存」「分離不安」の 3 つである。

攻撃性：酒井ら（2000）による HAQC から「短気」と「言語的攻撃」について，それぞ

れ友人に対する行動と家族に対する行動を測定した。

手続き：自尊感情尺度への回答は，月曜日から金曜日まで 5 日間連続で，帰りの会毎に

お願いした。また，金曜日にはそれに加え，ストレスの頻度も記入してもらった。また，

調査は研究 と同様に，2 か月の期間をあけて 2 回行い（Time1, Time2），それぞれ同じ手

続きで回答してもらった。5 日にわたる回答で得られた自尊感情の個人内平均得点を level of self-esteem 得点（以下，自尊感情得点）とし，5 日間の個人内標準偏差を stability of self-esteem 得点（以下，変動性得点）とした。

研究 ストレス脆弱性としての随伴性自己価値

調査協力者：北陸地方の中学生 371 名（男子 184 名，女子 187 名）を分析の対象とした。

測度： 自尊感情尺度：山本ら（1982）によって作成された Rosenberg の自尊感情尺度を使用した。

随伴性自己価値尺度：石津・下田（2012）による尺度を用いた。これは Burwell &

Shirk(2006)による、随伴性自己価値尺度の日本語版であり，原著者の許可を取り日本語

に翻訳し，信頼性および妥当性が確認されている。

学校ストレス尺度：岡安ら（1999）によって作成された 12 項目を使用した。

ストレス反応尺度：岡安ら（1999）によって作成された 16 項目を使用した。

手続き：素因ストレスモデルを確認するため，調査は 2 か月の期間をあけて 2 回実施された。

研究 自尊感情と随伴性自己価値が怒りの処理に及ぼす影響

調査協力者：北陸地方の中学生 375 名（男子 198 名，女子 177 名）を分析の対象とした。

測度： 自尊感情尺度：山本ら（1982）によって作成された Rosenberg の自尊感情尺度を使用した。

随伴性自己価値尺度：石津・下田（2012）による尺度を用いた。これは Burwell &

Shirk(2006)による、随伴性自己価値尺度の日本語版であり，原著者の許可を取り日本語

に翻訳し，信頼性および妥当性が確認されている。

学校での怒りの多次元尺度：下田・寺坂（2013）によって翻訳された，

Multidimensional School Anger Inventory (MSAI; Smith & Furlong, 1998) を用いた。

怒り表現尺度：反中（2008）による尺度を用いた。項目数の関係から，ここでは友人場

面にのみ限定して，回答してもらった。

手続き：本研究は横断的研究であるため，複数回の回答は求めていない。帰りの会にお

いて，担任の先生によって一斉に配布し，回答の後回収された。

また，上記すべての研究において，倫理的な配慮について，各学校長と話し合い，回答

拒否権，個人情報の保護などは十分な説明を行った。

4. 研究成果

研究

まず，自尊感情の変動性がどの程度変化す

るのかについて、Time1 と Time2 の自尊感情の変動性得点間の相関係数を算出したところ、 $r=.28(p<.01)$ であり、弱い関連が示された。一方、自尊感情得点も同様の相関係数を算出したところ、 $r=.82(p<.01)$ であった。この結果は、自尊感情の高さ（低さ）は2か月の期間をあけても非常に安定的であるのに対し、変動性は安定的な指標とは言えないことが示唆された。

続いて、自尊感情とその変動性との関連を調べるために、Time1 と Time2 の相関係数を算出したところそれぞれ、 $r=-.25(p<.01)$ と $r=-.31(p<.01)$ であり、先行研究通りの弱い負の相関が示された。

また、自尊感情とその変動性についての関連性を縦断的に調べるために、交差効果遅延モデルを検証したところ、紫蘇感情の高さは変動性を低める方向に作用するが、変動性が自尊感情の高低に影響を与えるわけではないことが示された。一方、学校ストレスは自尊感情には影響を与えるものの、変動性にはほとんど影響しないことが示された。

研究

自尊感情得点とその変動性得点を、平均値を基にそれぞれ高群と低群に分け、4つの組み合わせを作成し、アタッチメントとの関連を検討した。² 検定を行った結果、自尊感情とその変動性の組み合わせとアタッチメントタイプに偏りが見られた（² (9)=16.29, $p<.10$ ）。残差分析の結果、自尊感情高群かつ変動性低群はアタッチメントタイプが「安定」の所に有意に多く偏り、自尊感情と変動性のどちらも低い群は「安定」に少なく偏っていた。これらの関連を量的に調べるため、相関係数を算出した。その結果、自尊感情は「不信・拒否」「安心・依存」「分離不安」の愛着と関連を示したが、変動性は無相関であることが示された。

攻撃性との関連を調べるため、友人と家族それぞれの「短気」と「言語的攻撃」を従属変数、自尊感情とその変動性をそれぞれ独立変数とした階層的重回帰分析を行った。step1 では自尊感情とその変動性を、step2 ではその交互作用項を加え step1 から step2 の R^2 を算出したところ、友人への短気と家族への短気において、有意な R^2 が見られ、交互作用項の影響が見られた。下位検定の結果、Kernisらの結果とは異なり、子どもの場合、自尊感情が低くかつ変動性が高い者ほど、短気を起こしやすいことが示された。

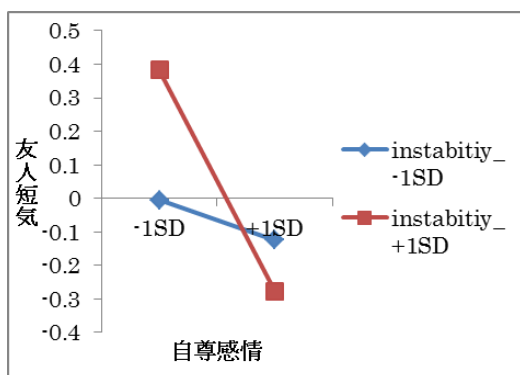


Figure2 友人への短気への影響性

研究

まず、Time1 と Time2 それぞれの自尊感情と随伴性自己価値との相関係数を算出したところ、それぞれ $r=-.17(p<.01)$ と $r=-.17(p<.01)$ であり、非常に弱い負の相関が示された。

一方で、自尊感情と随伴性自己価値がストレス反応に与える影響を検討するために、Time1 得点の自尊感情、随伴性自己価値、ストレス反応得点から Time2 のストレス反応への影響性を検討した。なお、ここでの Time1 ストレス反応は共変量となっている。その結果、自尊感情も随伴性自己価値も単独では2か月後のストレス反応には影響を与えていないことが示された。

続いて、自尊感情と随伴性自己価値がストレスラーのストレス反応に与える影響力の強さに作用するか否かを検討するため、階層的重回帰分析を行なった。まず、自尊感情について検討するため、step1 では性別と Time1 ストレス反応を、step2 では自尊感情とストレスラーを加え、step3 では自尊感情とストレスラーと自尊感情の交互作用項を投入した。従属変数を time2 のストレス反応とする重回帰分析を行ったところ、step1 から step2、step2 から step3 への R^2 が有意なものであり、交互作用項の影響が見られた。下位検定の結果、自尊感情が低くストレスラーが多い者は、ストレスラーが多く自尊感情が高い者よりも、強いストレス反応を示した。同様の分析を、随伴性自己価値についても検討した結果、Figure3 に示されるように、ストレスラーが低いときは随伴性自己価値が高い者はストレス反応がより低いが、ストレスラーが強くなるにつれ、ストレス反応が急激に高まることを示された。

研究

最後の研究では、高自尊感情者に加え、高随伴性自己価値者の怒り処理のプロセスを検討した。まず研究と同様に、自尊感情と随伴性自己価値の相関を算出したところ、 $r=.02$ (n.s.) であった。怒りの処理については二つの尺度を用いたが、まず MASI では怒り換気場面でどの程度怒りを感じるかを測定する「怒り体験」と、処理のプロセスとして「皮肉的態度」、「破壊的表出」、「積極的対処」から構成される。怒り表現尺度では怒りの表現を抑制したり、言い返さない傾向である「怒りの内向性」、仕返しや表情への出やすさを測定する「怒りの外向性」、気を静めようとしたり、自分のことを振り返るような「怒りのコントロール」から構成される。ここでは、これまでの研究とは異なり、データは横断データであるので、上記の変数を

従属変数に、性別、自尊感情、随伴性、それらの交互作用項を独立変数とした重回帰分析を行った。「怒り体験」に対しては、弱いながらも随伴性自己価値から影響を受けていることが示された($r = .12, p < .05$)。また、「皮肉的態度」には自尊感情が負の影響を与えていたが($r = -.27, p < .01$)、随伴性自己価値の影響は見られなかった。「破壊的表出」には自尊感情が負の影響を与える一方で($r = -.25, p < .01$)、随伴性自己価値は正の影響を示していた($r = .11, p < .05$)。「積極的対処」には自尊感情も随伴性自己価値も正の影響を示した(それぞれ $r = .12, p < .05, r = .12, p < .05$)。

怒りの表現については、「怒りの内向性」については随伴性自己価値が正の影響、自尊感情が負の影響を与えており(それぞれ $r = .28, p < .01, r = -.21, p < .01$)、「怒りの外向性」に対しても随伴性自己価値が正の影響、自尊感情が負の影響を示した(それぞれ $r = .11, p < .05, r = -.26, p < .01$)。「怒りのコントロール」に対しては、随伴性自己価値が正の影響を示した($r = .14, p < .05$)。また、随伴性自己価値と自尊感情の交互作用項の影響が有意であり、下位検定の結果、自尊感情が高く随伴性自己価値が高い者は「怒りのコントロール」が高いが、同じ自尊感情が高く随伴性自己価値が低い者は、「怒りのコントロール」が低いことが示された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 15 件)

1. 村井政雄・下田芳幸・石津憲一郎 小学校低学年に対するストレスマネジメント教育の試み 学級活動と体育科における実践的研究 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 第 6 巻, 53-63 頁
2. 窪田俊介・石津憲一郎・下田芳幸 学校生活意欲とストレス, ソーシャルサポート, 学校生活スキルの関連について(1) U-Q 各群間の担任イメージと学校適応 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 第 6 巻, 65-76 頁
3. 只石展英・石津憲一郎・下田芳幸 欠席の要因と不登校の未然防止 欠席日数に影響を与える要因 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 第 6 巻, 87-96 頁
4. 吉田圭吾・下田芳幸・石津憲一郎 中学生を対象とした Q-U の活用に関する研究 教員の意識調査および Q-U のデータ分析から 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 第 6 巻, 131-136 頁
5. 石津憲一郎 中学生の自己概念と過剰適応(1) 現実自己と理想自己を捉える 2 つの視点 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 第 6 巻, 77-86 頁
6. 石津憲一郎 中学生の「自己解決」ピリーフと過剰適応の学校適応に対する作用 学校心理学研究, 第 12 巻, 41-51 頁
7. 石津憲一郎 中学生の自己概念と過剰適応(2) 2 つの視点から見た現実自己と理想自己の差異と学校適応 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 第 7 巻, 1-6 頁
8. 窪田俊介・石津憲一郎・下田芳幸 学校生活意欲とストレス, ソーシャルサポート, 学校生活スキルの関連について(2) 主観的評価と担任評価にギャップのある生徒の分析 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 第 7 巻, 7-14 頁
9. 高信智加子・下田芳幸・石津憲一郎 中学校教員の不登校支援に関する実態調査 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 第 7 巻, 21-26 頁
10. 石津憲一郎・安保英勇 中学生の学校ストレスへの脆弱性 - 過剰適応と感情への評価の視点から 心理学研究, 第 84 巻, 130-137 頁
11. 石津憲一郎・下田芳幸 中学生用情動知覚尺度(EAQ)日本語版の作成 心理学研究, 第 84 巻, 229-237 頁
12. 畠中あゆみ・石津憲一郎 共感性が向社会的行動に及ぼす影響 - 社会的望ましさ尺度を用いて 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 第 8 巻,

1-6 頁

13. 羽賀祥太・石津憲一郎 個人的要因と環境的要因がレジリエンスに与える影響 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 第 8 巻, 7-12 頁
14. 小川徳重・石津憲一郎・下田芳幸 通信制高校の教育相談における外部機関との連携の在り方についての検討(1) 通信制高校生はどのような援助ニーズをもっているのか 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 第 8 巻, 13-22 頁
15. 下田芳幸・石津憲一郎・榎村正美 中学生における感情への評価と学校適応感の関連性についての検討 心理学研究, 第 84 巻, 576-584 頁

[学会発表](計 8 件)

1. 下田芳幸・石津憲一郎・榎村正美 中学生の感情への評価に関する研究(1) 学校適応・ストレス反応に影響を与えるストレスと感情への評価の交互作用 日本心理学会第 76 回大会論文集 859, 専修大学
2. 石津憲一郎・下田芳幸・榎村正美 中学生の感情への評価に関する研究(2) ソーシャルスキルに影響を与えるストレスと感情への評価の交互作用 日本心理学会第 76 回大会論文集 860, 専修大学
3. 池田忠義(指定討論者)・松川春樹(企画)・遠藤歩(企画)・石津憲一郎(司会)・内田美子(話題提供者)・阿部恵(話題提供者)・大島進吾(話題提供者) 「初心者のつまずきについて考える 4」 日本心理臨床学会 29 回大会自主シンポジウム, 愛知学院大学
4. 石津憲一郎・下田芳幸 思春期用 Self-Worth Contingency Questionnaire (SWCQ) 日本語版の作成 日本学校心理学会第 14 回大会論文集 52, 高知大学

5. 安達智子(指定討論者)・水野治久(指定討論者)・大久保智生(企画)・半澤礼之(企画・話題提供)・石津憲一郎(話題提供)・都筑学(話題提供者)・岡田有司(司会) 「学校適応はどのようにとらえられるのか(4) 時間という視点から見た児童・青年の学校適応」 日本教育心理学会 54 回総会自主企画シンポジウム, 琉球大学
6. Ohtsuki, T., Uemura, M., Kakutani, Y., Kijima, Y., Ishizu, K., & Shimoda, Y. Measureing psychological inflexibility in Japanese adplescents. The 4th Asian Cognitive Behavior Therapy (CBT) Conference, Teikyo Heisei Univercity, Japan.
7. 池田忠義(指定討論者)・石津憲一郎(指定討論者)・松川春樹(企画)・遠藤歩(企画)・内田美子(話題提供者)・阿部恵(話題提供者)・大島進吾(話題提供者) 「心理臨床における「つまずき」を治療構造から考える」 日本心理臨床学会 32 回大会自主シンポジウム, パシフィコ横浜
8. 石津憲一郎 思春期における自尊感情の変動性(1) 日本心理臨床学会 32 回論文集 479, パシフィコ横浜

[図書](計 1 件)

1. 石津憲一郎 学校で気になる子供のサイン(五十嵐哲也・杉本希映 編) 少年写真新聞社
6. 研究組織
(1) 研究代表者
石津憲一郎 (ISHIZU KENICHIRO)
富山大学人間発達科学部・准教授
研究者番号: 40530142